

# 河北新報

広告特集



— 東日本大震災13年 —



撮影地/石巻市(網地島沖)

あす見つめ  
この地に立つ

13年の歩み  
能登に重ねて

銀のうろこが輝く  
夜明けの石巻市網地島沖  
定置網船の網の中で  
魚たちが飛び跳ねる  
あの日  
海の男は船や網を失ったが  
苦境を力に変えてきた

東日本大震災から13年  
能登半島では  
当時と似た光景が広がる  
遠く離れていても  
心は一つにできる  
立ち上がった人々と  
能登へのメッセージを  
紹介しよう

# ワカメ養殖で脱炭素

気仙沼市階上の杉ノ下漁港。ささやかな風よけを巡らせた岸壁の作業場に、もうもうと湯気が立ち上る。宮城県が全国一の収穫量を誇る養殖ワカメの浜ゆで作業だ。



海中から引き揚げたばかりの長さ2メートル以上のワカメは鈍い金色をしているが、95度の海水で熱を通し、再び冷たい海水に浸すと鮮やかな緑色になる。小ぶりのドラム缶を寝かせたような回転式の機械にワカメと天日塩を投入し、塩の白が見えなくなったらワカメの身に塩分が程よくもみこまれた合図。専用のかごに移されたワカメは軽トラで近くの加工場へと運ばれ、茎と葉の仕分け、葉に付着した小型のエビや砂、傷んだ部分の除去などを経て、ようやく小売店で見慣れた塩蔵ワカメの姿になる。超高压での水抜きなど一部に道具の力を借りるもの

の、ほとんどの工程が手作業で進む。ワカメは若芽の響きや美しい髪への連想からか、恋心を詠んだ和歌にも登場するなど古くから日本人に親しまれてきた。朝食のみそ汁、左党なら酢の物、健康志向の人にはサラダやサプリメントと、その場面も多彩。そんな身近な食材にいま、温暖

化対策という新たな光が当たられようとしている。「宮城ブルーカーボンプロジェクト」。漁業者、研究者、行政機関が連携し、漁業の営みを通じて二酸化炭素が海中へ固定される量、すなわちカーボンフリー（脱炭素）貢献量を客観的に算出し、環境配慮型の漁業を目指す。

ところで、ワカメを食べてしまったらカーボンフリーにならないのでは？ と思っただけは正解。実は養殖の各過程で海中へ放出され、しかも容易に空気中へ戻らない、つまり人の口に入らないワカメが存在する。具体的には、水揚げ前にもぎれたり、若芽を固定するロープから離れたりして海中へ流出する「堆積」「深海輸送」、メカブでおなじ



収穫したワカメの株は2束から長いもので5束にもなる。できるだけ早くゆでるため、黙々と作業が続く



この冬一番の冷え込みの朝に作業に当たっていた藤田さん(左)ら藤田商店の皆さん

藤田商店 気仙沼市

## C O<sub>2</sub>の海中固定化に一役



自慢のワカメ、メカブをはじめ、旬の味をバックしたホヤウニ、タコなども直売している

みのネバネバ成分などの「難溶性有機炭素」、磯焼け対策として禁漁区の水やアワビに与える「給餌」といった分がある。2022年の宮城県の養殖ワカメ生産量に基づき試算では年間60トンの二酸化炭素吸収効果が見込まれ、生産者を代表して県漁協が申請者となり第三者機関の認証を取得しようと準備を進めている。養殖が行われなければ生まれなかった「副産物」として炭素が固定された点がミソだ。



脱炭素の取り組みを広く知ってもらおうと、仙台市青葉区の複合施設「CROSS B PL US(クロスビープラス)」で行われた「宮城県ブルーカーボン・シンポジウム」

気仙沼市階上地区で、県のモデル地区として実証に取り組む漁師の藤田純一さん(46)は「昨年は海水温がワカメの生育に適した温度までなかなか下がらず、種のはさみ込み(陸上作物という苗の植え付け)が遅れた。環境にプラスになる取り組みを進め、積極的に発信したい」と話す。

藤田商店  
気仙沼市波路内内126-1  
0226(27)3147  
営業時間は月曜から金曜の午前9時~午後4時

### 何ができるか考えたい

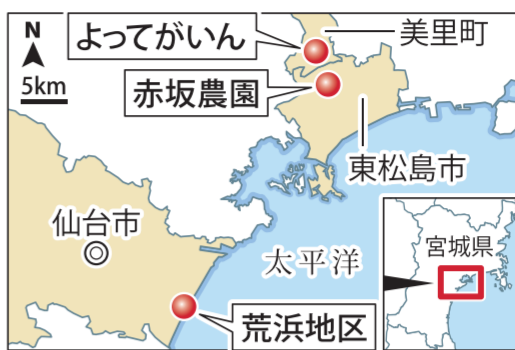
震災を経験して日も浅く、この先どうなるのが見えないつらさがあるだろう。先日、石川県のお客さんから加工品発送の注文が入り、聞いてみると水産物もこちらとはかなり

### 能登地震に寄せて

違うような話だったので、頼まれていないものと一緒に送り、喜んでいただいた。現地の状況や必要な支援は、場所や時期によっても今後も変化するはず。個人、地域、会社、さまざまな場面で何ができるか考えていきたい。(藤田純一さん)


# 絆が紡ぐ北限の綿花

ふわりとした新雪のような真っ白な塊をまとった低木が一面に並ぶのは、東松島市大塩寺沢の「赤坂農園」。塊は木綿糸の原料になる綿花。名前は花だが正確には「実」で、中には種もある。国内有数の50坪ほどの栽培面積があり、「北限の綿花」と呼ばれている。両手でつまんで引くと、文字通り「糸を引く」ように、絡み合った繊維が細く長く伸びる。



熱帯から亜熱帯を原産とし、国内ではほとんど作付けされていない綿花の畑が東北に生まれ、たきっかけは2011年の東日本大震災だった。

農園主の赤坂芳則さん(70)は、宮城県美里町は、東松島市以外にも耕作地を有し、その一つが

仙台市若林区荒浜にあった。津波は丹精込めた土を流出させ、海から運ばれた砂とともに一帯をがれきの山に変えた。海水はなかなか引かず、残った耕作土に塩分が浸透していった。震災から2カ月後、赤坂さんのもとにアパレル業界の関係者が訪れ、「被災した圃場で、塩害に

強い綿を作ってみないか」と提案があった。仲間の農家に相談すると興味を示してくれ、「コメを作れないなら、やってみよう」と話が始まった。全国からボランティアが集まり、同年7月、「東北コットンプロジェクト」が開始した。稲作ができなくなった土地で綿花を育て、糸を紡ぎ、商品化を通じて被災地を支援する狙いだ。

11年の夏は暑く、生育は順調だったが、豪雨に見舞われて畑が水浸しになり、初年の収穫はわずか。12年も梅雨の長雨で苦戦した。雑草対策と土の保温を兼ねた農業用シートへの導入などを試行錯誤を経て、収量が安定するまで5年かかった。その後は段階的に水田の復旧が進み、塩害対策は役割を終えたことから荒浜の作付面積は縮小した。



たわわに実った綿花を摘み取るボランティア。アパレル業界の関係者らが全国から訪れた

## 赤坂農園 — 東松島市

### 支援 地域活性化にシフト

方、震災を機に生まれた絆を生かそうと、現在は赤坂農園のほか、名取市の農家が作付けを続けている。

23年11月、赤坂農園の畑に各地のアパレル関係者が集まり、綿花の収穫体験に汗を流した。綿花を用いた地域活性化を目指す全国の関係者が集う「サミット」が東松島市で開かれたのに



宮城県産の綿花を原料に用いたタオル製品が買える「直売所よつてがいん」



震災後間もない時期に仙台市若林区荒浜地区で行われた綿花の植え付け。現在、この土地では水稲の作付けが再開されている

合わせ、ボランティアで収穫を手伝ってくれた。プロジェクト開始から10年余りを経て「被災地を支援する」枠組みを脱却し、各地の中小企業が手を携え、国産コットンのブランド化へのシフトを進めている。

これまでに、ジーンズなどの衣類、タオルや手ぬぐい、布マスクなどが商品化された。赤坂さんは「東北の気候で綿花が育つと実証できたので、まちおこしにも役立てたい。栽培法を紹介し、綿花を栽培してもらい、それを集めた特産品に育てたい」と夢を描く。

直売所よつてがいん  
宮城県美里町二郷字前谷地1  
14  
0229(50)2105  
営業時間は月曜から土曜の午前10時~午後5時

#### 支援のタイミング注視

東日本大震災の前から、大災害が起きると自分にできることは何かと考え、不便な環境でも力をつけてもらいたく、うちで作っているものから、湯通しするだけで食べられる餅

#### 能登地震に寄せて

などを送ってきた。今回の地震があったすぐに支援物資の受け入れについて問い合わせたが、個人の食料支援は受けていないとのこと。どのようなタイミングで何ができるか、引き続き関心を持って見守ってきたい。(赤坂芳則さん)



かつて牧場として開墾した土地を綿花畑に生まれ変わらせた赤坂さん


(順不同)

# ビール醸造広がる輪

石巻市の中心市街地は震災の津波が直撃し、商店街は衰退した。地区に唯一残っていた映画館は廃業。建物は売りに出たが買い手は現れない。60年の歴史がある映画館の解体が目前に迫っていた。

購入に名乗りを上げたのは、市内で栽培したホップを委託醸造してクラフトビールを製造していた一般社団法人イシノマキ・ファーム(石巻市)。「建物はしっかりしている。解体は忍びない」と感じていた代表理事の高橋由佳さん(59)は「念願のビール醸造所をつくる」と決意した。

資金は全く無かったので国に補助金を申請し、金融機関に融資を申し込んだところ、熱意が通じたのか両者とも承認。2022年に醸造所「イシノマキホップワークス」が完成した。



障害者の就労支援をする仙台市のNPO法人からスピンアウトする格好で、16年に法人化されたイシノマキ・ファーム。農業を軸とした被災者の心のケアと就労支援を展開する中で、石

巻市北上町に約30坪の畑を借りてホップの栽培を始めた。初めて収穫したホップを一関市の酒造会社に委託して、石巻初のクラフトビール「巻風エール」を200リットル醸造したのは17年。人手もノウハウもないまま醸造所建設計画が進む中で、宮城県内の別のビール醸造所で醸造長を務めていた岡恭平さん(42)が「面白そうだ」と事業に参加。巻風エールのファンで、登米市のビーチサッカーチームに所属していた三木海周さん(28)もブルワー(ビール職人)として加わった。

現在は巻風エールの他、巻風IPA、巻風WHEATを主に造る。エールは爽やかな香りとしっかりした飲み応え、IPAはホップをしっかりと感じられる味わい、WHEATはフルーティーでスパイシーな香りが特徴



①イシノマキ・ファーム代表理事の高橋さん(中央)、岡さん(右)、三木さん(左)  
②ホップ収穫祭で摘み取りを体験する参加者ら=2023年7月、石巻市北上町

イシノマキ・ファーム — 石巻市

## 被災地に集う仲間と情熱

「売れ行きは好調。仙台や東京のビアバーなどから注文が相次いでいます」と高橋さん。タンク8基はフル稼働状態。年間4500リットルを造り、瓶やたるに詰めて出荷する。

昨年(2023)は日本地ビール協会(事務局・兵庫県)が主催するインターナショナル・ビアカップ2023の「German-Style Wheat Ale (ドイツ由来製法の小麦ビール)」部門で、巻風WHEATが銀賞を受賞した。17の国と地域の296ブルワーが出品した大きなコンテストでの快挙だった。今年1月には醸造所隣接地に立ち飲みができる交流の場「タップルーム」を開設した。ビールを縁に人の輪がどんどん広がっている。

高橋さんは「ホップの生産量を増やすとともに、どんどん販路を拡大して将来的には輸出も手掛けてみたい」と言葉に力を込めた。



好評のクラフトビール。左から巻風IPA、巻風エール、巻風WHEAT



### 能登地震に寄せて

#### 被災地へ思いつなげる

被災者は大変な思いをしながら日々過ごしているはず。1月に石巻市内で売り上げを全額寄付するビールイベントを開催したら14万円近く集まった。被災地にはなかなか行けないが、東日本震災を経験した私たちに「何かしなければいけない」という思いは常にあります。そんな思いを被災地につなげたい。(高橋由佳さん)

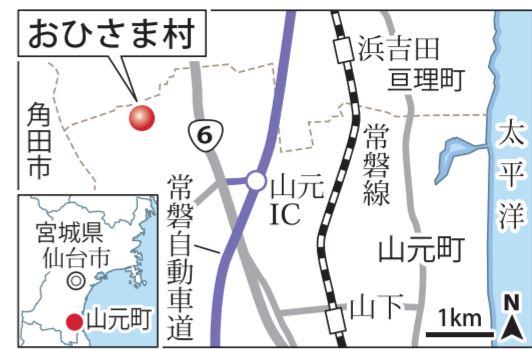
日本政策金融公庫 仙台支店	東北学院大学	チャレンジドジャパン	DNP 大日本印刷	MITSUKOSHI
日本製紙株式会社	未来のエスキースを描く。 東北工業大学	椿本興業株式会社	株式会社タイハク	ANA Inspiration of JAPAN
今日と未来を、つなぐ。 日本生命	1933年創業 玉虫塗総本舗 東北工芸製作所	つばさ税理士法人 wing-partners	Daiwa House®	一生涯のパートナー 第一生命 Dai-ichi Life Group 仙台総合支社
あしたを、つなぐー 野村不動産グループ 野村不動産	TOYO TIRES	DIC グラフィックス株式会社 Color & Comfort	自然を愛し未来の郷土づくりで地域に貢献する 株式会社 武山興業	大王製紙株式会社
株式会社 萩野工務店	JAL JAPAN AIRLINES	INOAC 株式会社東北イノアック	創業慶長元年 TAZEN SINCE 1596	大成ハウジング

# 耕作放棄地 育む交流

宮城県沿岸部の最南端に位置する山元町は温暖な気候で、町の西端を南北に走る阿武隈山地の丘陵地ではかねてリンゴなどの果樹栽培が行われてきた。震災の津波に洗われた平地は民家が滅り、耕作放棄地が急増した。

そんな町で2019年に設立されたのは、農園経営会社「おひさま村」。県内の中学校で教員を務めた鈴木一さん(60)が、16年に早期退職後、起業した。「社名のおひさま」は温かさを、「村」はさまざまなが集まる場所をイメージして名付けた。鈴木さんが教えてくれた。耕作が放棄された果樹園や畑を借りて「おひさま村農園」と名付け、果樹栽培や畑作を拡大させている。

リンゴ農家の長男として山元町ですと暮らしてきた鈴木さんは、町の将来を憂っていた。被災後、市街地の街並みや防災拠点整備されたが、町民は減って耕作放棄地が増えたと感じていた。「町に就労の場は少ない。やがて消滅してしまうのではない



忘れられない味がある。父が果樹園の一角で栽培していた生食用イチジクだ。芳醇な香りと甘さ、ねっとりした食感が衝撃的だった。イチジクを甘露煮で食べる文化が根付



オレンジ色が鮮やかなハロウィンスイート

現在の事業の柱は、山元町や、町に隣接する巨理町の耕作放棄地を借りて取り組むサツマイモ栽培。温暖で砂地の沿岸部はサツマイモの栽培に適している。「焼き芋で食べるのがベスト」(鈴木さん)という「紅はるか」、甘くてねっとりとした食感の「シルクスイート」、オレンジ色が鮮やかな「ハロウィンスイート」といった品種を2袋で作付けし、40tを収穫した。今年

く宮城県で、生食用を栽培している農家は少ない。果物の販売だけでなく、収穫や枝の剪定といった体験型事業を起業とともにスタート。種無しユズやブルーベリーなどへ幅を広げた。

## おひさま村 — 宮城県山元町

### 作付け、収穫 体験拠点に

3袋に拡大する方針だ。

果物、サツマイモとも「作付けや収穫を体験したい」というニーズが増えている。昨年は小学生と保護者のグループ、商工会婦人部、果物やサツマイモをスイーツの材料として購入しているパティシエら延べ約300人が畑や果樹園を訪れたという。

鈴木さんは言う。「スマートフォンでポチッとすれば食べたいものが届く時代だけ、どんな環境で育ったのか、どんな手入れをしているのかは分からない。知らないで食べるのと、知っているのでは味は異なる」



おひさま村のイチジクを使ったタルト。山元町の洋菓子店が季節限定で販売する



昨年10月は仙台市の西中田小児童が芋掘り体験に訪れた。児童が掘った大きなサツマイモを手にする鈴木さん



「いっばいあるぞ」。楽しみながら芋掘り体験をする西中田小児童

**能登地震に寄せて**

**かつての日常必ず戻る**

東日本大震災を体験しているわれわれにとって、能登地震は人ごとではない。日本中はもちろん、海外の人たちも被災地を応援している。直接支援に行けなくても、心の中で応援している。今はつらくても、復興を諦めないでほしい。諦めなければ、時間はかかるかもしれないが、かつての日常は戻ってくるはずだ。(鈴木一さん)

<p>— Create the Future — MORI TRUST GROUP</p>	<p>MITSUBISHI ELECTRIC Changes for the Better</p>	<p>MIZUHO みずほフィナンシャルグループ</p>	<p>株式会社 深松組 FUKAMATSU</p>	<p>夢、かぎりなく。</p> <p>HMT</p>
<p>山一地所</p>	<p>南三陸 ホテル 観洋</p>	<p>みずむすび</p>	<p>Fuji タイヤはフジ</p>	<p>日本三景松島を望む四季の美しさ</p> <p>日本三景/松島 花の湯 新富亭</p>
<p>理研食品</p>	<p>車検・点検は自動車整備振興会会員工場へ 一般社団法人 宮城県自動車整備振興会</p>	<p>三井不動産 MITSUI FUDOSAN</p>	<p>FUJISAKI www.fujisaki.co.jp</p>	<p>株式会社 パナソニックシステムネットワークス開発研究所</p>
<p>RICOH リコージャパン株式会社</p>	<p>Ju 宮城 宮城県中古自動車販売協会 宮城県中古自動車販売商工組合</p>	<p>三井不動産リアルティ東北 MITSUI FUDOSAN REALTY TOHOKU</p>	<p>FUJIFILM 富士フイルム ビジネス イノベーションジャパン(株)</p>	<p>花はんグループ Hanahan Group</p>
<p>ワールドアイシティ</p>	<p>MIYACHU</p>	<p>人を、想う力。街を、想う力。 三菱地所グループ</p>	<p>CREATIVE PARTNER HOKUTO 株式会社 ホクトコーポレーション</p>	<p>khh 東日本放送</p>
<p>再生へ 心ひとつに</p>	<p>明治安田</p>	<p>三菱重工機械システム</p>	<p>空から見える、いい仕事。 株式会社 丸本組</p>	<p>食の安全と発展に貢献する 株式会社 フードケア</p>

(順不同)

まずは「自分の出来る復興支援は何かあるか?」を考えることが大事だと思います。どんなことでも、被災された方はとてもうれしく、励みになります! 希望を捨てず、明るい未来を想像して頑張ってください!

宮城県七ヶ浜町 遠藤洋一さん(24歳)

慣れ親しんだ土地を離れ新しい環境で生活を始める方に心から応援したいと思います。不安な事もあると思いますがうれしい出会いや出来事もあると思います。心の中の故郷は変わりません。東日本大震災被災者より。

仙台市青葉区 佐々木加代子さん(57歳)

大丈夫です。今は、「どうしたらいいんだろう」と、何も考えられないと思います。それでいいんです。それが当たり前です。「ああ、あの時こうだったな」と、振り返ることができる日が必ずきます。だから大丈夫です。

宮城県美里町 るるるるさん(50歳)

元日に起きた能登半島地震。家族を亡くした東日本大震災と重なり胸が痛んだ。今すぐ心の切換えは難しいと思う。時の流れと人の優しさという薬を頂き、ささやかな楽しみを見つけて前に進んでほしいと思う。

仙台市若林区 佐々木清和さん(57歳)

あの日、頑張ろうという言葉をかけ合いました。きっと頑張れる日が、必ずやってきます。支えられた今を生きている私がいいます。寒い毎日、辛い毎日あの日と重なり、胸が痛む毎日です。祈り続けています。

石巻市 鈴木のリ子さん(70歳)

3.11当日、帰宅でき、家族の安否を確認できました。しかし、2日目から車の燃料がなく職場に4日程泊まりました。現在の能登半島から見れば半人前の体験談です。明日は必ずやってきます。

宮城県利府町 林美千夫さん(72歳)

負けるな! 共に頑張ろう!!

石巻市 ともさん(21歳)

私自身も、東日本大震災を経験しています。あのときは、心のダメージが非常に大きかったです。今回の能登半島地震の被災者も心のダメージがまだ残っていると思います。焦らず・諦めずにできることを頑張らしましょう!

仙台市泉区 けんちゃんさん(22歳)

がんばろう能登  
がんばろう石川  
がんばろう北陸  
朝がこない夜はない  
我々はワンチーム

仙台市宮城野区 nobuさん(69歳)

## 能登半島地震被災地へ、 宮城・東北から想いをつなぐメッセージ



13年前の2011年3月11日に東日本大震災を経験している私たちだからこそ、北陸の被災地の方々へ伝えられる言葉、寄り添える言葉があります。今回「能登半島地震被災地へ、宮城・東北から想いをつなぐメッセージ」をテーマに、読者の皆さまからメッセージを募集いたしました。

多数お寄せいただいた中の一部をこのページで紹介させていただきます。

お寄せいただいたメッセージはこちらからご覧いただけます。



取り戻そう。大好きな石川を、そして能登を! 長い道のりだけど宮城石川県人も共に頑張ります!

仙台市泉区 宮城石川県人会さん(64歳)

皆さん「泣けていますか?」辛い今、泣いてください。私達も、3.11から出口のない暗いトンネルにいましたが、今は笑顔で暮らしています。大丈夫。絶対出口もあるし、笑顔になれる日がきますから。大丈夫。

塩釜市 アマノさん(56歳)

東日本大震災の時、ライフラインと食べ物がない中、最大の支えは周りの方々の絆でした。それは自分の栄養となり、今までたどり着くことができました。ぜひ、周りの皆さまと絆を築き、力を合わせて乗り越えて下さい。

石巻市 リチャード・ハルバーシュタットさん(58歳)

東日本大震災を経験した者として伝えたい事。それは頑張り過ぎないことと笑顔を忘れない事です。「止まない雨はなく、明けない夜はない」のです。全国民が応援しています。頑張れ! 能登!

気仙沼市 木村頼枝さん(73歳)

東日本大震災の復旧復興では、能登地域の自治体職員や住民の皆さまにご支援ご協力を頂いたことは忘れません。経験から、人口流出を止めるためには、定住などに係る復興計画を早急に作成することだと思います。

名取市 佐伯孝一さん(70歳)

5年前に富山、石川県を旅行しました。その際、皆さんに親切に接していただきました。私ができることは、募金しかありません。被災された方々の復興を、心より祈っています。

仙台市太白区 加藤いづみさん(50歳)

東日本大震災、32歳新米ママだった私は「頑張る、大丈夫、ママだから」が口ぐせ。今思えば、その頑張りが自分を苦しめていたと思います。ママたち、吐き出したくなったらつぶやいて。私、空を通じて受け取ります。

仙台市宮城野区 リリママさん(45歳)

好きな音楽を聴いたり、好きな食べ物を食べたり、自分にご褒美が大事ですよ。

東松島市 ビーグルこちゃん。さん(49歳)

かつて私達が感じたように“被災地”となった事で目の前に大きな不安が横たわっているかと存じます。自助に努め、迷わず共助・公助を求めて下さい。東日本大地震の教訓がいまの皆様の助けになるよう祈っております。

宮城県南三陸町 阿部憲子さん(61歳)

避難所での生活だけでも大変なのに、小さな子供を連れての避難生活は、精神的にとっても辛くなると思います。全部自分で抱え込まないで下さい。周りにSOSしてください。きっと助けてくれる人がいるから!!

富谷市 イセさん(47歳)

今でも思い出す震災の事。私達もどん底から這い上がってきました。多くのボランティアの方の応援に励まされ頑張る力をいただきました。

多賀城市 頑張る母ちゃんさん(68歳)

私が東日本大震災で経験して学んだことは、悲しいときは我慢しないで泣くこと、辛いことや悩みがあるときは自分だけで抱え込まないで誰かに話すことです。こうすることで、気持ちが落ち着いてきます。

宮古市 松本勝徳さん(62歳)

石巻から毛布や飲食品を持参した際に、能登の方々の即時避難や集会所での助け合いを目にして、大きな希望を感じました。災害の度に心が痛みますが、未来の命を守るため、人のつながりを大切に、共に歩んでゆきたいです。

石巻市 中川政治さん(47歳)

頑張るとは言いません。これまで頑張ってきたのですから。全国から応援しています。必ず復興できます。お体ご愛ください。

仙台市泉区 佐藤三男さん(73歳)

能登、金沢は私の青春そのもの。自分でできる限りの支援をしていきます。一緒に前を向いて一歩ずつ歩いていきましょう。

仙台市泉区 ナミ平さん(77歳)

本特集は、企画趣旨に賛同いただきました協賛社の協力で制作、発行いたしました。ご協賛いただいた企業・団体の皆さまに感謝申し上げます。尚、当企画の収益の一部を、北國新聞社と北陸中日新聞を発行する中日新聞北陸本社を通して、能登半島地震被災地の復興に役立てていただきます。また、同じく河北新報社より、東日本大震災の伝承や防災教育に取り組む団体に活動資金として助成させていただきます。